

空間コードから共創する中川運河
第4回オープンディスカッション
未来の「インダストリアル空間」を考える
成果報告

2018年8月3日
都市コミュニケーション研究所

目次

概要	1
ディスカッション要旨	2
ディスカッション記録	3
議論をふまえて	14
次回に向けて	16
謝辞	16

【概要】

- 主催： 都市コミュニケーション研究所
代表：竹中克行（愛知県立大学教授）
- 開催日時： 2017年5月26日（土）14:00～16:45
- 開催場所： 西宮神社・社務所
- 登壇者： 大矢泰正氏（株式会社大矢鋳造所 取締役・企画室長）
西住真一氏（有限会社ニーズ工業 代表取締役）
樋口哲也氏（リンナイ株式会社 広報部次長）
（以上、五十音順）
- 司会進行： 竹中克行
- コーディネータ： 内山志保
- 参加者： 22名
- ***
- 内容進行：
- 14：00～14：30 趣旨説明（竹中克行：都市コミュニケーション研究所代表）
中川運河空間コードの視覚的普及メディア紹介（クレメンス・メッツラー）
<http://riuc.takenaka-lab.net/media.html>
- 14：30～15:30 テーマ1ーこれからの名古屋にふさわしい町中のものづくり

15：40～16：40 テーマ2—ものづくり企業にとっての中川運河沿岸用地の利用価値とは
16：40～16：45 総括

【ディスカッション要旨】

※本要旨の後にディスカッション全体の記録があるので、併せて参照されたい。

第4回オープンディスカッションは、「未来のインダストリアル空間を考える」を共通テーマとし、ものづくり企業と中川運河の関わりのこれからを展望することを試みた。「インダストリアル空間」は、都市コミュニケーション研究所で提案した中川運河の12の空間コードの一つであり、これが議論の手がかりとなる。生産規模や生産システムに占める位置が異なる3社の方にご登壇いただくことで、町中ものづくりの今後について、広い視野からのご意見・ご提案を得ることができた。

「これからの名古屋にふさわしい町中ものづくり」をテーマとする前半のディスカッションでは、開発・販売・広報など、ものづくり企業の多面性をふまえながら、町中の空間の今後のいかしかたについて、各登壇者のご意見を伺った。資料投影を交えながら展開された各社の特徴や中川運河との関わりについて手短かに要約すれば、運河開削の頃から本社・工場を運河沿いに構え、環境配慮に工夫を凝らしながら、同地で新たなチャレンジを展望（大矢鋳造所）；名古屋市内で協力業者のネットワークをつくりながら、顧客のニーズにきめ細やかに対応する一品もの中心の工場を経営（ニーズ工業）；生産機能を郊外に移した現在も、創業の地である中川に本社にとどめ置き、協力を受けてきた地域の人々への恩返しに腐心（リンナイ）、となるだろうか。三者三様とはいえ、技術と品質へのこだわりの強さは、名古屋の町中工業の底力を感じさせる。また、町中への立地については、人付き合いやネットワークづくりのやりやすさといった、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の面で有利性があることが看取された。

後半のディスカッションは、「ものづくり企業にとっての中川運河沿岸用地の利用価値とは」をテーマとした。ものづくりに直接関わる企業からみて、運河沿岸用地にはどのような今日的利用価値があるのか、どのような条件が新たな投資を呼び寄せるきっかけになるのかについて、登壇者の方々の意見を伺った。得られた意見の中で特徴的だったのは、中川運河はものづくり文化を継承し、市民に普及するための場所としてふさわしいのという発想である。その具体例として、日本鋳造工学会が行っている子ども向け鋳物教室の町中版（大矢鋳造所）、学生が溶接技術を体得するための場づくり（ニーズ工業）、生活の中のものづくりにふれる場としての中川運河（リンナイ）、といったアイデアがあがった。それらを約言するならば、ものづくり企業が居住機能などと共存しながら中川運河エリアで操業しつづけるために、また生産拠点を他に移した企業が地元との繋がりを維持するために、たんなる工場立地を超えた多面的な企業と地域・社会との接点をつくることに積極的な意義を見出すべき、という考え方に整理できるのではないか。

今回のオープンディスカッションでは、フロアからも活発な質問・意見が寄せられた。中川運河エリアは名古屋のものづくり文化が集積している場所なので、クリエイティブ産業の形成拠点になりうるという見方の一方で、クリエイターは最先端の生の情報が得られる場所に集まるので、東京と張り合っても空転するのではないかという意見もあった。そうしたなかで、発言者によって言葉は異なるものの、ふだんの生活の中で気づきにくいものづくりの技術や文化を体感・体得できる空間として中川運河をとらえたとき、そうしたエリアの特性を体現するキラーコンテンツに相当する場所が必要で

はないか、というのが一つの議論の筋でして浮かび上がった。併せて、リニア開業を見据えた名駅西エリアの再開発や間近になった椿町線の開通は、中川運河の立地条件やアクセシビリティを大きく変える可能性があることが指摘された。中川運河の将来は、幾重もの鉄道線の存在によって断ち切られた名駅との連結性の回復、そしてリニアなどの交通革新を通じて名駅の先に広がるメガリージョンとの関係を見据えて構想すべきではないかというのが、今回のオープンディスカッションから見えてきたもう一つの重要な論点であった。

【ディスカッション記録】

※ディスカッション記録は、当日のテープ起こしをもとにしているが、論旨を理解しやすくするために、本旨に影響しない範囲で一部割愛または文章表現の手直しを行った箇所がある。発言者の敬称はすべて省略し、文体を「ですます」調に統一した。

挨拶

竹中 愛知県立大学の竹中克行と申します。名古屋を中心とする実践的な都市研究をしています。中川運河では、2012年に再生計画が策定されたのち、何度か沿岸用地の事業提案募集が行われ、雰囲気が変わってきました。2017年には賑わいゾーンと位置づけられている堀止から長良橋において、にぎわい創生プロジェクトが公表されました。

名古屋市は大きな自治体ですから、産業振興、文化振興に関する分厚い計画を作っています。ものづくり、アートなど、中川運河の再生のキーワードに直結するような計画もあります。そこで、分野別に行われている政策をどうやって横に繋いでいけばよいかを考えたいと思います。

最近の動きとしては、リニアの関係で都心再開発が動いています。椿町のアンダーパスが近く開通し、名駅西エリアと中川運河が直通するようになります。アンダーパスのルートは中川運河が出来る前の笈瀬川のルートとよく似ています。そのことから考えても、名駅の動きは中川運河の未来と関係が深いといえます。

都市コミュニケーション研究所 Web サイトにおいて、第3回目までのディスカッションの記録が参照できるようになっていますので、ご関心のある方はぜひご覧ください。

本日は、基調レクチャーに変えて、空間コードの考え方を分かりやすく広めようという考えのもとに、メッツラーさんを中心に制作に取り組んでいる視覚的な普及メディアについて、メッツラーさんご本人から紹介していただきます。

〔メッツラー氏による約15分間の説明〕

テーマ1ーこれからの名古屋にふさわしい町中のものづくり

竹中 今回は、「未来のインダストリアル空間を考える」というテーマです。前回、かなり大きなテーマを設定し議論を行いました。その中で出てきた論点をふまえながら、今日はものづくりにフォーカスして考えたいと思います。

登壇者のお三方はものづくり企業といっても分野が違います。製造業の生産システムの中で、どの部分を担っているかということでも違いがあります。企業によって中川運河との関

わり方、中川運河の将来像についての視点が違うのではないかと思います、それぞれの立場からご意見をいただければと思います。

インダストリアル空間というのは、本の中で紹介している中川運河らしさを表す 1 つのコードですが、これを手掛かりとして、これからの名古屋にふさわしい町中のものづくりとは何かを考えていきたいと思っています。名古屋のものづくりというのはいつも言われることですが、しだいに生産現場が郊外に移転してきています。そこで、開発・広報など、ものづくり企業の多面性をふまえて、町中の空間をどのようにいかすのがよいのかということについてご意見を伺いたいと思います。各企業の紹介をいただきながら、コメントをお願いできれば幸いです。

大矢 西宮神社のすぐ南隣の太矢鋳造所です。

これは、上空 6 キメートルからの名古屋です。リンナイさんがここにいます。そして、本日専務の長谷川さんがお越しのアルプススチールさんは、中川運河の隣人ということで、このあたりにあります。

私どもの会社ができたのは 1919 年。来年で 100 周年になります。

銅合金の鋳造を行ってしまして、製品はベアリング（軸受け）の保持器です。いろいろなタイプのベアリングに対応して作っています。

昭和 12（1937）年、現在の地に中村区から引っ越してきました。この絵に描かれているのは、今もある木造の建物です。船が浮かんでいるのが中川運河です。昭和 12 年頃はこんな感じでした。

大阪に本社がある NTN さんが主要取引先です。従業員は 102 名、ベトナムからの実習生が 12 名おります。本社工場と第二工場、敷地は 4 千平方メートルあります。

これは、電気で溶かす高周波誘導炉というものです。一度に 500kg の金属を溶かすことができるものが 2 基あります。鋳物屋さんというと、普通は砂で型をつくって製品をつくりますが、私たちは、砂を使わずに遠心鋳造という方法をとります。鋳物屋さんですが、大半は製品を作るために旋盤やマシニング、ブローチ、フライスなど、加工を行っている会社です。月に 300t くらい、個数でいうと 10 万個の物を作っています。

弊社のモットーは「正しく明るく」で、合わせると社長の正明という名前になります。品質方針や環境方針については、お手元に配りました会社案内に詳しく書いてありますので、ぜひご覧ください。

鋳造から一貫生産しているのが一番大きな特徴です。金属を溶かして、型に入れて、削って形を作ると保持器ができます。鋳型を回転させて、溶湯（溶けた金属）を注ぐとパイプ状、リング状のものを作ることができます。縦型、横型などがあります。ここで、日本鋳造工学会が遠心鋳造について紹介したビデオがありますのでご紹介します。

遠心鋳造のメリットは、不良を少なくでき、安定した製品を作れるということです。銅合金は、熱や電気が伝わりやすく、さびにくい、耐摩耗性に優れている、軸受け特性が優れているなどの性質があります。ブラスバンドに使われるブラスは真鍮、ブロンズ像などに使われているのは青銅です。船用のプロペラはアルミニウム青銅です。名古屋の老舗すき焼き屋さんの女将に頼まれて、すき焼き鍋を作ったこともあります。秘密は鍋底の厚みにあります。軸受けはふだん目にすることは無いと思いますが、洗濯機、掃除機、新幹線、風力発電など

回転するところにはいろいろな大きさのものが使われています。風車では、直径が1mぐらいある、中華料理屋さんの丸いテーブルぐらいの大きさのものが使われています。歴代の新幹線にも私どもの製品が使われています。風力発電機用保持器はこれからもたくさん作って対応していきます。

1919年創業当時、最初はベンチャー企業でした。来年になったらもう一度ベンチャーを再開したいので、アドベンチャーぐらいかなと思っています。

西住 社名はニーズ工業と申します。野立橋と中野橋の間ぐらいにあり、創業は1983年1月、私が生まれた年でもあります。父が創業者、去年の4月に代替わりして社長となりました。社員は6名で、さまざまな金属製品の設計・製作・加工等を行っています。大矢さんのように主力製品があるわけではなく、建築、食品、車輛、個人のお仕事など、本当に多様な仕事をやらせていただいています。ステンレス、アルミ、銅、真鍮、チタン、いろいろな金属を使っていろいろなものを作っています。会社名の由来でもあるお客様の「ニーズ」にお応えする、ということでやらせていただいています。

どういう会社かご理解いただくには、これまでに何を作ったかをご紹介するのが一番わかりやすいと思いますので、写真を用意しました。

これは首相官邸です。小泉政権の時に、首相官邸の家具の足回りを作らせていただきました。私が高校生の頃でしたが、短い納期で徹夜して制作しました。カリモク（カリモク家具株式会社）さんの依頼で仕事をしました。

これは沖縄のイオンで、人が1人は入れるぐらいの球体を制作しました。

これは、5mmの丸棒で牛の顔をつくってほしいという依頼を受けて作ったものです。写真だけを渡されて、見比べながら形を作りました。気に入っていただき、結局5個ぐらい作りました。

これはパイプを曲げる機械の台です。

これは噴水の水を一時的にためるタンクです。

これは自動販売機の補充をしている会社の車で、屋根の上に乗せる台を作成しました。

これは介護施設で、シャワー台にストレッチャーが当たって破損するのを保護するためのステンレス製パイプです。小学校、地下鉄の手すりなども作ります。

これは、ご近所のおばあさんの手押し車に、体重を掛けても安全なように補強をした仕事です。こういったちょっとした改造をしてほしいという依頼はよくありまして、ヨーロッパで自転車を買ってきたけど穴を空けてほしいという依頼や、五徳（ごとく）が折れたから直してほしいという依頼もありました。メーカーに頼むとまるごと交換になってしまい、5万ぐらいかかると言われたものを、1000円ぐらいで直してあげました。

これは電磁誘導加熱コイルで、銅のパイプを巻いて、真鍮と銅をロウ付けして作りました。

これはアルミ製のスロープで、バイクを出し入れするためのものです。軽いものがないということでアルミを使い、現場で採寸、設計加工しました。

これはJAPAN ARMORED BATTLE LEAGUEという大会に出たいという人のために、鉄板で甲冑を作ったものです。他には、栄の質ウエダの天井のシャンデリアのフレームも作りました。

中学の同級生の浅井さんの依頼で、舞台装置のフレームとキャストの制作も行いました。

その前にも、1枚1枚重みを感じながらめくるための鉄板でできたアルバムを制作したりもしました。

今までなかったもの、無理難題を良くも悪くもご注文くださる方が多い。お客様のニーズにお応えしていろいろなことをやっているうちに、いろいろできるようになりました。刈谷ハイウェイオアシスにもうちが作った噴水があるなど、いろんなところで仕事をやらせていただいています。いろいろやりすぎていて、これというものが無いが、それがうちの強みだと思います。

樋口

リンナイの樋口です。まず私の自己紹介から始めたいと思います。入社25年目になります。本社に来たのは1年前で、それまでは大口（おおぐち）にある技術センターにいました。23年間プロダクトデザイナーを務めていて、昨年4月に本社で広報部に異動になりました。商品の宣伝を行う部署だと思われがちですが、それは営業部で、広報部は会社の宣伝をしています。

大矢鑄造さんの1年後輩にあたる1920年の創業で、2020年に100年を迎えます。リンナイという名前は、ご存知の方もいると思いますが、創業者である内藤と林の頭文字でリンナイ商会としたことが由来です。

国内で3600名、子会社を入れると1万を超える社員がいます。国内で15社、海外の子会社が31社あります。

原点は身近な発想から生まれました。創業者の内藤が、今川焼の店先で石油コンロを見て、その青い炎に魅せられ、こういうものを自分で作ってみたいと思ったのが始まりです。創ってみたら評判が良かったということで、内藤が製造と開発、林が営業でスタートしたのが1920年です。創業当時のものづくりのDNAは溶接加工、板金加工にあり、わが社の強みとなっています。

創業当時は現在の堀止のあたりにありました。中川運河ができる前からここに会社がありまして、古い書物を読むとこの辺りではないかと推測しております。その後、運河をつくるということで、立ち退きを要求されて今あるところに移りました。

第二次世界大戦のときに、ガスコンロを数年間やめて、軍事製品を制作していました。飛行機の部品を作っていました。戦火に遭い、一時は一宮のあたりの紡績工場を間借りして操業していました。その後、もとの場所に工場と事務所を建てて再スタートしたという経緯です。これは操業当時の写真です。数名からスタートしました。

現在、売上の大部分は給湯器で、60%が給湯器、25%が厨房機器となっています。こだわりは、重要な部品は自分たちで作るということです。原点思想を守る唯一の手段だと思っております。バーナー、熱交換器、電子ユニット、ガスをコントロールする部品、水をコントロールするバルブはグループ会社で内製することによって品質を担保しています。

中川区では製品は作っていません。5年ほど前は少し離れた愛知町に愛知工場を持っていて、町中でテーブルコンロを作っていました。近隣の人に迷惑がかかる、手狭であるということで大口に移転しました。主要工場はすべて愛知県内で、大口で厨房、瀬戸で給湯器を製造しています。尾張旭については、最初は野原の中でしたが、徐々に住宅が増えてきたため、別の機能に変更する予定です。金沢で電子制御ユニット、静岡で給湯器を製造しています。今年度の決算で海外比率が50%を超える予定です。地図上の色分けは、販売拠点、製造拠点が

ある国，製品が使われている国を示しています。アフリカ，南米は文化もだいぶ違うのでまだ入りきれていません。

ものづくりで中川運河との繋がりは難しいけれども，リンナイの考え方を交えながらお話できればと思います。

竹中 3人の方々のお話をお聞きして，3社は，規模の面からみると一桁以上違う一方で，技術力と品質へのこだわりが共通するところだと感じます。

大矢さんは，すぐ隣に工場を含めてフルセットで設備を持っていると理解していますが，なぜそれが可能だったのかを考えると，高度な技術と周辺への環境負荷が少ないことに特化していることに秘訣があるのではないかと思います。100年間継続していて感じる，この場所の良さとはなんでしょうか。

大矢 もともと中村区で創業していて，昭和12年に移転してきましたが，中川運河ができたころは何もなかったところがいつのまにか町中になってしまいました。

私たちは安全第一，品質第一でやっておりますが，いい人が集まりやすいところにいるというのがメリットです。地域の方と一緒にこれからも100年でも200年でも，回るものがある限り作っていきたいと思っております。粉塵も出ますが徹底して集塵をしています。病院もあるので配慮をしながら，ご理解いただけたらと思っております。普段みていただけない部品を今日は見ていただけました。地域の中で一緒に存続していきたいと思っております。

今はほとんどトラックで運んでしまうので，水運はあまり意識したことはないのですが，沿岸用地の倉庫は更衣室で使っています。風力発電用製品などを考えると手狭になるので，新しい場所が使えたら嬉しいなあと思っております。

中小企業が新しいことに挑戦して生き残っていくには，生産性が大切です。同じ100人ぐらいの人数で，2割でも3割でも増産できるといいなあと思っております。頭を使って，新しい技術を使っていきたいです。金型遠心鑄造は，採用した当時は新しい技術で，不良品の出ない作り方です。それに甘んじることなく，もうひとひねりして，スペースの有効活用をしていきたいです。3階建ての本社工場は1階も2階も生産設備が入っています。限られた土地を有効利用して，同じものを作るのにもっと手間をかけない生産がこの場でできれば，もうしばらくやっていきたいと思っております。

竹中 ニーズ工業さんは，一品もので，注文が入る度に工夫をして製品を作っておられるので，受注の仕組みが難しいのではないかと想像します。いろんなところから少しずつ注文が入るので，周りの関連企業とのお付き合いが大事になるといったことはあるのでしょうか。

西住 お客様の数が70社ぐらいになりますが，僕が窓口になっています。レーザーで切るだけという加工業者はたくさんあるのですが，弊社のような何でもやれる業者は少なく，今まで頼んでいたところがおじいさんでやめてしまった，といった事情で注文が来るケースが増えていきます。お客様が多い分手間が多いのは確かです。1000円，2000円，10,000円という仕事がたくさんあります。そういう仕事の受け皿でありたいと思っております。ただ，小さい会社なのですぐに一杯になってしまうので，協力業者は何十社もあります。切断，仕上げはここに頼んで，というようにしています。自分も飛び込みで頼めるところを探して，注文にお応えできるようにと努力しています。協力業者は近隣，ほぼ市内です。中川区近辺では2，3社です。

竹中 北イタリアにみられるような、ものづくり企業の水平的なネットワークを知ることができて感銘を受けています。

リンナイさんは創業の地はここですが、工場は移転してしまったというところが、他の2社と大きく違いますね。工場はないけれども、昔からの拠点をいくつか維持しているということも伺っています。ARToC10 の原資となった資金も提供しておられます。工場はないですが、リンナイと中川運河との関係性は強まってきた面もあるのではないのでしょうか。これから中川運河周辺とのお付き合いをどのように考えておられますか。

樋口 福住町の本社を東京や名古屋駅近くに移すという発想は、これまでいくらでもできたはずですが、本社をあそこに置いておく必要性はないのですが、それでも動く気はありません。広報部で本社にいるいろいろな方と接点を持つ機会があります。地域の方、弊社のOBの方とお話をすると、創業から一番お世話になっているのは地域の住民の方だということがわかりました。製造メーカーは一人では何もできません。ものづくりに協力いただいて、そこで存続できました。そういう人に恩返しするのがこれからの使命だということ、自分もそれを教え聞いています。本社を移転する気がないというのは、あそこにいれば何らか皆さんに還元できるのではないかということを考えているというのが、われわれのスタンス、思いだと考えます。

その一方で、ものづくりでこの地域に還元するというのは、今のところは難しいです。これだけ大きな母体ですと、生産性、従業員の数、デリバリーを考えると、高速道路に近いということが重要です。

竹中 ものづくり現場としてこの場所を活かせるかどうかは規模によるということでしょうか。同時に、町中に立地しているということは、人との付き合いやネットワークを作りやすい、人材確保の点で魅力があるというのは共通項として浮かび上がってきたように思います。

<休憩>

テーマ2—ものづくり企業にとっての中川運河沿岸用地の利用価値とは

竹中 これからの中川運河の主として沿岸用地を念頭において、その周辺も視野に入れながら、沿岸の土地の利用価値は何かという、中川運河の再生にとって根本的な課題について話し合いたいと思います。基本的なテーマでありながら、現状、はっきりとした方向性が見出されていないという気がしています。とりわけ、ものづくりに直接関わる企業にとってどのような利用価値があるのか、こういう条件が揃えばさらに企業が集まってくるのではないかということについてご意見を伺えればと思います。発想力が必要なテーマですので、フロアの方々からもアイデアを頂ければ幸いです。

大矢 日本の大学の中で、金属を溶かして物にするという鑄造の授業を行っている大学が減っています。私は名工大の金属工学科、早稲田大学の鑄物研究所へと進んだのですが、早稲田大学では材料工学科がなくなってしまいました。ものづくりは材料があってそれを加工するのが基本です。今はバーチャルがあるかもしれませんが、人が移動したいという気持ちは変わらない。孫に直接会いたいという気持ちはなくなりません。そういうものづくりに関わっていきたいと思っています。場所が手狭なので、もう少し大きな製品にまでバリエーションを広

げていきたいと思っています。もう少し倉庫スペースを確保できれば、製品の物流が効率よくできるようになると考えています。風力発電は2.4メガワットが標準的な大きさです。500本並ぶと原子力発電一基分の1ギガワットの発電量が出せます。そんな部品も作っています。

そうは言っても町中なので、これは私の個人的な意見ですが、鋳物はこうやって作るんだという子供鋳物教室を日本鋳造工学会が一生懸命やっているのですが、その町中版をやってみたいと思っています。富士コーヒーさんが開いておられる喫茶店をいいなあと思って見えています。アイスクリームカップのようなものを作ってみたいなどということを考えたりもします。狭い場所ですが、有効に利用して、まちの賑わいにつながるような、ものづくりをやっている会社でありたいと思っています。少しでもこの場所で長く仕事をやっていきたいと思っています。

竹中 名古屋市の産業振興ビジョンでは、価値づくり産業をキーワードとして打ち出していて、物理的にもものを作るということについては、めっき、溶接、プラスチックなど、昔からある技術をあげています。鋳物もその中に入ってくるのかなと思うのですが、とくに高度な技術で一つひとつの付加価値が高いもの、あまり広大なスペースを必要としないものは町中に残って行ってほしいと個人的には思っています。

他方、産業政策と空間計画とを重ね合わせたときに、中川運河の土地利用計画をどう位置付けていけばいいのかという視点が必要だろうと思います。再生計画ではエリア分けをしていて、ものづくり産業ゾーンは中流域に設定されていますが、場合によっては小規模な事業所であれば都心寄りでも存続できると思います。ものづくり企業といっても、社会との接点はさまざまあるので、鋳物子ども教室という例であげられたように、技術文化を広める、知ってもらおうということで、企業と社会との接点を広げるのも、企業にとっては意味があることだと思えます。そういういったことは町から遠く離れた所ではなく、アクセスしやすいところで行った方が、相乗効果を生むのではないのでしょうか。そういう考え方を社会に普及していく場所として中川運河を利用できないかと思えます。

西住 私は正直申しまして日々に一生懸命で、中川運河がどうということはないです。もともと六番町でやっていて、28年ぐらい前に、たまたま今の場所に移動してきました。金属加工を一般の人に知ってもらいたいということはありません。溶接教室をやってみたいという気持ちはあります。名城大学から注文をもらったときに、製品を取りに来た学生に、体験で溶接をやってもらったこともあります。こういう技術があるんだということを知ってもらわないと、仕事を頼もうとも思わないでしょう。小回りの利く人が減っているのだと思います。社員を増やして、もう少し自分が自由に動けるようになったら、体験教室もやってみたいと思っています。

ところで最近、隣の土地を買って工場を建てました。拡張計画を立てたさいに、中川運河沿いの土地が空いているなあと思ったのですが、買い上げができない土地ということで選択肢から外れました。立ち退きの時に壊さないといけないのも私たちのような企業にとっては利用しづらい条件です。もともと立っている倉庫を改装して使えるなどのメリットがあるなら、選択肢として検討に上がったと思います。

竹中 今回の西住さんのご意見は、沿岸用地の今後を考えるにあたって重要な論点だと思います。沿岸用地は、運河開削当初は荷捌きのための空地でしたが、だんだん倉庫が建ちはじめ、1960年

代～70年代には倉庫が立ち並んだわけです。その後、物流に求められる規格が変わってきて、現在の一般的な物流規格では利用しにくくなってきている。一方で、むしろあの大きさが良いというものづくり企業のニーズがあるのならば、それをどう受け止めていくかが大切ではないかと思います。西住さんから、躯体をそのまま使えるのであれば魅力的な選択肢になったとのお話がありました。名古屋市の土地としてキープされているので、再開発を戦略的に考えることができるわけです。公有地であることのメリットを生かしながら、今のニーズに合わせるよう検討することが必要ではないかと思います。

樋口 リンナイとして何ができるかという切り口では、社内でもたくさん課題があります。今の社業としてものづくりで何かという話になると、今はそういう状況にはないです。

私個人で思うことですが、私の母校は愛知県芸で、デザイナーが足りないので母校に求人に行く、プロダクトデザイナーを専攻しているのがほぼ女性で、目指しているのが雑貨だと聞いて愕然としました。私が学生のころはプロダクトというと工業製品、自動車、家電製品だったはずが、そこに夢を抱く学生がいなくなっていました。ものづくり愛知と言われるなかで、危機的ではないかと思っています。なぜそうなったかはわかりませんが、大矢さんが言われた、鋳物子供教室のように、学生や小さいお子さんが「プロダクトって何？」「ものづくりって何？」といったことにふれる機会がないと思います。科学館とかにいったりしてふれるのではなく、自分の近くにそれがある。本屋に行ったついでに溶接教室があったら行くというぐらいの感覚で、新しい施設をつくるのではなく、生活の中に馴染んでいるものづくりというものがあってもいいのではないかと思います。それが中川運河にあって、土着的に学生が集まって来たりして、ものづくりを新しく展開するということになるのではないかと。これまではそういうことにふれさせる機会がなかったので、わりと簡単な方に流れていっているのではないかと思います。物余りの時代なのかもしれないですが。それがこれからのリンナイの課題かもしれないと思いますし、われわれがやらなくてはならない地域貢献なのかもしれないです。

竹中 工業製品をミュージアムの中に綺麗に陳列するよりも、ものづくりの現場に直接触れるような場所をつくる必要があるというお話だと思います。前回のオープンディスカッションにおける三菱地所の雛元さんからのご提案で、中川運河の倉庫敷地は水陸両面あり、車のアクセスはいいので、企業のショールームを並べるには良い場所だと思うというお話がありました。実際に、沿岸用地の事業提案募集で、愛知ドビーさんがバーミキュラを使った料理教室を展開するという提案をしています。製品に直接触れてもらって、その製品で何ができるのかを提案する場として中川運河をとらえる、つまり、ものづくり企業と社会の接点として中川運河用地に注目されたものと理解しました。そのような場所を中川運河沿いに広げていく、苗床づくりのようなことができる面白いのではないかと思います。

何年か前にチャンネルアートで企画されたシンポジウムの中で、県立芸大の関口さんから、工学系のコンテンツ産業を育成する場所として活かしたらいいのではないかという提言がありました。学生にもものづくりを体験させる場所、大学側の言葉でいうとインターンシップになると思いますが、その拠点を中川運河に持っていれば、大学にとってはアピールポイントになるし、地元の企業にとってもメリットがあるかもしれないですね。場の特性をいかした空間利用を、戦略的に、目的意識を持って進めることがそろそろ必要だと感じています。

ここで会場からもご意見を求めたいと思います。

木村 木村と申します。中川運河上流の笈瀬川の水源と言われる児玉というところからやってきました。この場所との繋がりでは、小栗橋から鎌倉街道沿いに西に行ったところで、竹田大助記念館という前衛画家の記念館の管理をしています。

私は書店を経営していたこともありまして、ショップとか小売店は欠かせないと思っています。古い街道沿いの展開と、新しいものの展開のどちらも必要。リンナイのお菓子を作る機械を買ったのですが、この製品でこういうことができるということを示すにはショールームの展開が良いと思います。鋳物の高岡では、3000円払うと砂で鋳物のカップを作る体験ができるということもやっています。(中川運河が) 外に工場を持っていかなくてはならないほど街化されているかということ、まだまだだと思っています。洋菓子店があって、それは実はリンナイの製品を使って作っているとか、そういうものが幾重にも出てこないといけない。古いものをできるだけ残して、一方でとびきり新しいものを作るというように、コントラストが町には欠かせないと思います。昔ながらの鋳物屋さんかと思っていたら全然違っているとか。行政的なアウトラインは大事ですが、やる気のある面白い、パイロット的なお店を誘ってやってもらうことが必要。とにかく具体的にやるのが大切だと思います。

大矢 私どもの製品は工業部品で、みなさんの手に触れることがないものです。個人的には人々の目に触れるようなものを作りたいという気持ちもあります。唯一、先ほどご紹介したすきやき鍋がありますが、この器に乗せるとアイスクリームが3倍ぐらい美味しくなるという面白いものを作りたい。商売の幅が広がり、あと100年先の入口に立てるかもしれません。船に向かってアイスクリームを売るなどという夢みたいなことも思わないでもないです。

竹中 空間としてみても、中川運河は名古屋の町の歴史からすると比較的新しいですが、100年経つとそれなりに土木遺産としての風格が帯びてきます。物理的な存在である運河が都市のなかに生み出したフレームを大事にするという視点は、意識化されるべきだと思います。そのさい、建物の建て替えは必然的なプロセスとして進んでいくと思いますが、少しお金をかけてでもイメージ資源として残しておきたいものはいくつがあるのではないかと思います。民間の投資だけでは難しいものは、公共性のある拠点づくりのために活用していくことも必要だと思います。そうすることで、大きな空間ゆえの100年の風格と、後から挿入されたものが混在する面白い空間になるのではないのでしょうか。

藤澤 キャナルアートの藤澤です。3社のお話を伺うと、いずれも中川運河との関連性は偶然性で成り立っているようなのですが、あえて意味付けをすることが大事ではないかと思っています。中川運河はものづくり企業で生きている、日本では類をみない場所ではありますが、中川運河に在るということに意味づけをして、発信するプロモーションが必要だと思います。どうして集積しているんですか？と聞かれたときに、遡ってみると偶然だったというよりも、こういう初期値の人達が集まって集積しているということが言えると、中川運河というものがより視覚化されるのではないのでしょうか。

竹中 その作業は誰がやればよいのでしょうか。

藤澤 地方にいくと組合などがあると思いますが、それは同じ種類の組合であるわけです。思いとか、仕組みとか、初期値を一度視覚化すると、ひょっとして意味付けができるのではないかと考えておりまして、竹中先生に期待しています。

- 西住 藤澤 なぜそこで会社を立ち上げたのかという情報をたくさん集めていくということでしょうか。
- 藤澤 自分たちで自分たちのやっていることを意味づけるのは難しいと思いますので、第三者がやるべきだと思います。ヒアリングしてこういう初期値が得られましたという結果と、リンナイさんの話というのは実は一緒で、実はこういう思いが繋がっているから中川運河にいるんじゃないですか？という、少し強引ではありますがそういう調査が面白いのではないかと。そんなに時間をかけずとも地域を発信する材料になるのではないかと思います。
- 竹中 ドロレス・ハイデンというアメリカの建築家書いた『場所の力』という有名な本がありますが、オーラルヒストリーから場所の履歴を繙いていき、地域全体の共通の価値をもつものとして描いていくという、そういう話なのかなと思います。今後の課題とさせていただければと思います。
- 藤澤 たんなる偶然性ではなく、何かしら初期値があるから集積しているに違いないというのを意味づける必要が出てきているのではないかと。こういうオープンディスカッションも含めて、どうして中川運河なのですかという問いを前にあまり関係ないという話だと、オーディエンスも今ひとつ盛り上がりません。
- 藤田 キャナルアートの藤田です。浅井君がクリエイティブなことをやったという話がありましたが、ものづくりは発想力、アイデアから始まると思います。アートやクリエイティブともものづくりの融合が生じるように、クリエイターがこのエリアに住むということが起らないかと思っています。身近なところに町工場があると試作ができ、クリエイターが来ればいろいろなプロダクトができていく。倉庫のような場所があって、安く借りられて、工房になり、人に見せたいときはショールームになるという、そういう潜在性が中川運河にはあると思います。ゼロから工場をつくるということではないので、できないことではないと思います。
- 竹中 東京だったら城東地区だと思いますが、名古屋でそうならないのはなぜでしょうか。
- 藤田 先日大阪で、ストロー現象によって大阪からデザイナーがいなくなっているという話を聞いてきました。私もデザイン会社をやっているのでも他人事ではないと思っています。クリエイティブなブランドがこの周辺にはできるのではないかと。町の工場の方々が協力的になってくれればできるのではないかと思います。
- 大矢 真向いで下水処理場の上が公園になると聞いています。外国の方がジョギングで来ることもあると思います。運河沿いの建物をペンキで雰囲気を変えて、窓枠を緑に塗り、先に形があるものに魂を込めるというやり方もあるのではと思います。六番町には名古屋市の工業研究所もありますが、ものづくり公園になったら嬉しいと思います。
- 竹中 リンナイさんからは以前、中川運河が開発拠点を設けるには中途半端なので、つくるなら東京に行ってしまうというお話を伺いました。クリエイティブ産業の集積の場になるにはどんな条件が必要でしょうか。
- 樋口 力技で、著名なデザイナーやプロデューサーを連れてきて、若者のクリエイターが集まるであろう最先端のコンテンツを盛り込んで変えてしまうのが手っ取り早いと思います。情報は生ものなので、集まる場所にどんどん集まります。最先端のところには最先端のものが集まる。もちろんインターネットでどこでも情報は取れると思いますが、取れた段階ではもう古いんです。だから最先端のところにはクリエイターは集まっています。しかし、中川運河はそれを狙ったところで東京には勝てないと思います。

例えとして適切かどうかわかりませんが、横浜の赤レンガ倉庫は、倉庫自体はさほど魅力的な建物でもないと思います。40代半ばの自分からしたら昔あった風景だと思いますが、若い人からしたら新鮮なのかもしれないと思います。今の時代はスクラップビルドではないし、現存する財産をいかにうまく使っていくかという視点が大切なのではないかと思います。

そして、何か焦点になるものは必要だと思います。本屋さん、家電量販店が来ても違うと思いますし。若い人、主婦層などでもいいですが、こぞって人が集まるようなキラコンテンツが一個あれば十分だと思います。そこに来れば何かやっている、学生がワークショップをしてもいい。アートだけではなく、技術研究をしてもいいのでは。人が循環していくようなものが定着すれば、自ずと活性化するのではないかと思います。卵が先か鶏が先かという話になってしまいますが、魅力的なものが1つできれば人の流れは変わると思います。ただ、東京に張り合わないほうがいいとは思いますが。

竹中 グローバル化が進んでいくなかで、以前とは違った都市間の序列の再編が起きています。少数の中心に集積するものと、比較的分散するものの両方があります。情報、文化、創造産業は集中化が著しいものだと思います。グローバル化に抗うのは効率的な戦略ではないし、多重化する世界の中で、自分たちの位置、名古屋の位置をどこに見定めるかという、抽象的ではあるが大きな戦略が究極的に必要なのだと思います。それを見失うといくらお金を使って投資しても結果が跳ね返ってこないということになってしまうでしょう。

上川 愛知県立大学を卒業しました上川です。小売店では手に届く商品から、物のイメージを受け取っていると思うのですが、逆にここは、何を作っているのか分からない。見せられてもそれが何か分からないし、手元に届くときも見えないところに埋め込まれている。しかも全部の工場が同じものではなくてそれぞれ違うものを作っていて、作っているもの自体は見えないところにあるのに、働いている人、さっきからずっと聞こえているこの音（神社裏手の工場の稼働音のこと）、建築物など、それを生み出しているものの存在はわかる。人に届いているものが、普通とは逆になっていて面白いと思いました。そこにメッツラー先生が言っていた独特の雰囲気を出している原因の1つがあると思いました。

私は瀬戸市の出身で、瀬戸市民全員が瀬戸のものづくりといえば焼き物だと思っているように感じます。バリエーションはあるけれども、焼き物という同じものをみんな作っていて、触れる機会はいくらでもありました。幼少期では授業や校外学習を年に1回は行って、作ったものが手元に届いて、年々家に増えていき、身近に生活に入り込んできていました。それが目に見えないというのは難しいのかもしれないですが、逆に、人とか土壌が先に伝わっていれば、技術などを人に伝えるというのは、これまでも出た具体的なアイデアにあるように、すごく難しいことではないのではないかと思います。

竹中 中川運河は成り立ちが港なので、物を見せる場として利用するのは1つの方向性としてあると思います。また、ささしまライブで特徴的なのは、コンベンションのためのスペースがたくさんできたことです。港としての成り立ちを利用して、外から人を入れながら、物づくり産業をグローバルに発信する腰掛として活用する、という発想があってもよいのではないのでしょうか。また同時に、たとえば（今回参加いただいている）アルプススチールさんのスチール製品のように、地元の企業の製品を知ってもらうことが、これからの都市づくりに必要なのではないかと思います。

- 西住 先ほど子どものころから瀬戸物にふれていたというお話がありましたが、子供のころからというのは大事だと思います。私も中学からアルバイトで仕事を手伝っていて、大学を出て一度就職しましたが、6年で家業に戻ってきました。小学校、幼稚園のころからふれることが大事だと思います。そのための施設、イベントがもっとあるといいと思います。メーカーズピアもできましたが、1つの取り組みとしていいと思います。
- 高山 名駅でリニアの関係の仕事をしていました。今日はリニアの話があまりありませんでしたが、潜在的にはみなさん意識を持っていらっしゃると思います。リニアができると、東京・名古屋・大阪で、スーパーメガリージョンという7千万の大きな都市圏ができます。人の流れが変わり、知的産業が影響を受けると言われています。これが脅威になるのか、むしろ旨味があるのか。私たちもどう世界が展開されるのか分からないままにやってきたところがあります。皆さまがどうお考えをもっているのかお聞かせ願いたいです。
- 大矢 町中にこんなに大きな運河があるところはここだけです。名古屋駅からあんなに間近に船溜まりがあって、われわれはもっと一緒になって考えていかなくてはならないと思います。
- 高山 名古屋は大きな都市なので、いろんな計画があるがそれを繋ぎ合わせるのが難しい。アンダーパスを掘っていて、中川運河再生にどうリンクさせるのかというのは当然のことではありますが、はっきりした計画があるわけではないと思います。ねらいは駅の東に集中している交通を西にも再配分するということです。中川運河とは本当は近いのですが、実際駅から数十秒で行けるということが体感できれば、人々の意識も変わるのではないかと思います。
- 竹中 リニアによって、名古屋が東京の郊外になってしまうのではないかとというのは、以前から言われていることです。しかし、同じつくるのであれば、リニアの力を中川運河の将来作りのために活かす方法を見つけていければと思います。
- 樋口 リニアができると東京まで40分になると、東京までの出張が都内から行くのとそれほど変わらなくなるのではないかと思います。アクセスとしては良くなるので、わざわざ（地価の）高いところに本社を構える意味がなく、営業所があればよいということになるかもしれません。名古屋は港や空港も近く、むしろ拠点的なものが来るのではないかと思います。梅田駅から大阪駅まで一駅分あるのですが、地下街で繋がっておりそこを歩く人が結構います。地上を歩いていると距離感がまともにありますが、運河の辺りが商業ベースになる土地ではないかと思ったりします。名古屋駅の地下街が伏見ではなく、こっちに延びてこないかなと。会社を出たら地下街を歩いて名古屋駅まで行けるようになるといいなと期待しています。
- 竹中 本日はフロアからも活発な意見をいただき、良い議論ができました。場所を貸して下さった西宮神社の氏子の方々にも感謝申し上げます。

【議論をふまえて】

中川運河の将来的利用価値を問うた第3回オープンディスカッションの流れを汲みつつ、今回は、ものづくり空間としての中川運河エリアに焦点をやや絞った議論を試みた。その前提には、ものづくり日本一の地域にあって港の一角をなす中川運河は、ものづくりの粋が凝縮した空間であるという理解があった。ディスカッションを行った結果、そうしたとらえ方の有効性が再確認される一方で、ものづくり文化の核としての中川運河の訴求力を継承するためには、たんなる下町工場の集積を超えた

新たな方向性が必要だと感じた。以下、数点に分けて総括しておきたい。

第一に、製造業や物流業の業態変化および運河周辺における市街化の進行（とくに住宅の増加）により、今日、中川運河エリアが生産拠点を置く場所としての優位性・利便性を有するのは、いくつかの条件が重なった場合に限られることが示唆された。とりわけ、運河両側の倉庫敷地は、本線でも奥行きが30m程度の細長い区画をなしているため、現代的基準に照らすと、中規模以上の工場・物流施設を配置するには手狭である。その反面、小規模事業所にとっては十分な潜在価値を有することがディスプレイを通して伺われ、用地賃貸に関するルールの緩和（返却時の更地化義務などに関して）によって利用活性化が進む可能性が看取された。かつて建築用地と称された道路を挟んだ外側においては、区画形状に関して前提となる制約はない反面、住宅などの他の用途との調整が求められる。とはいえ、情報産業やソフトウェア開発などを含む広い概念として現代のものづくりをとらえるならば、居住機能との共存は十分に可能である。この点、旧弊化した近代の産業地区を情報産業と住宅・サービス機能の混合地区として再生しようと試みる、バルセロナの22@計画などの事例が参考になる。

第二に、生産拠点の立地とは別の面で、ものづくり企業あるいは名古屋のものづくりにとっての中川運河の存在価値がクローズアップされた。ものづくり企業は、新しい製品・技術の開発、消費者や取引先に向けた広報など、工業生産を支える多面的な事業を遂行するとともに、地域・社会との良好な関係づくりを通じて、企業や業界としてのプレゼンスの維持・改善に取り組んでいる。とくに後者は、企業の存在を受け止める地域・社会の側にとっても、広い意味での文化・教育の享受に関わる可能性がある取り組みだけに、創意が求められる。議論の中で登場した子ども向け教室やインターンシップの拠点といったアイデアには、無数のものづくりの場と経験が埋め込まれた中川運河エリアだからこそ可能な、ものづくり文化発信の場所としての可能性が垣間見える。さらに、以前のオープンディスプレイで話題になったものづくりとアートの接点では、デザイン開発やブランド化といった視覚にアピールするクリエイティブ都市の戦略が浮上する。とはいえ、この地域のものづくりの粋は、表層的なデザイン性よりむしろ品質を支える技術の高さにあるのではないかとすれば、消費市場向けの最終製品を見て、触ることのできるショールームとともに、技術開発や素材加工を体感・体得できる場所をつくるのが、中川運河には似つかわしいのかもしれない。

そして第三に、リニアに象徴されるように、変わりゆく都市間の結合関係の中で中川運河の将来像を構想することの必要性が痛感された。かつて中川運河は、港と都心を結び、両岸のいたるところで水陸の繋がりを生む港湾空間としてデザインされた。この「細長い港」が物流軸としての機能を失ってすでに数十年が経過した現在、名古屋の町中を世界へ繋ぐ新しい玄関口として中川運河をとらえ直す発想力が求められるのではないかとすれば、リニアの開業を梃子とする名駅西エリアと中川運河エリアの連結は、そうしたプロジェクトに向けて大きな弾みになる可能性を秘めている。ささしまライブの再開発地区に多くのコンベンション空間が整備されたのは、このエリアがグローバルなコミュニケーションの核となることへの期待感の表れであろう。インターネットの情報網が縦横に張り巡らされた今日、多くの人々が対面できる空間の価値が再評価されているように、町を生業の場とする人々が生み出した文化を伝えるために、都市空間という器は絶好のコミュニケーション装置となりうる。

(都市コミュニケーション研究所)

【次回に向けて】

オープンディスカッションも今回で4回を迎え、参加者数はのべ 100 名余りになりました。オープンディスカッションには、地域の「らしさ」を可視化し、継承・進化させていく方法論としての空間コード研究の考え方を広く公開するとともに、地域の当事者を確認し、その結びつきを促す役割があります。そうした趣旨から、現に中川運河周辺で活動の実績がある方、これからの発展に関心を寄せている方、地理的に近い距離に生活や活動の拠点を置いている方などを登壇者としてお迎えし、いわば「中川運河の隣人」たる地元の人々による議論に軸足を置いてきました。今回は、産業空間としての中川運河らしさの源ともいえる、沿岸ものづくり企業の方 3 名にご登壇いただき、「ものづくり企業」と一括りに語られる中にも、各社各様の事業活動のあり方や考え方があることがよくわかる議論となりました。オープンディスカッションは、その場で何か具体的な方針を示したり、合意形成をはかったりする場ではありません。しかし、来場者も含めた参加者たちの発言を通して、そこにはどんな人がいて、どんな景観があり、どんな音がして、どんな匂いがするのかなど、その場所らしさを浮き彫りにし、理解を深める場となっていると感じます。運河沿いの運河と縁のある神社で議論を行っていることも、回を重ねるごとに意味を深めていると思います。今回は、神社のすぐ裏手にあるスチール家具工場の稼働音が偶然良い音響となり、「中川運河ってどんな場所？」という問いかけに対して、「五感と実話」を伴うイメージを与えてくれたのではないのでしょうか。その積み重ねが、中川運河の「らしさ」の可視化の解像度を上げ、未来に向けてより具体的で実体のある将来像を描くための情報源になるものと思います。

(内山志保)

【謝辞】

前回につづき会場をお貸しいただき、お茶・お菓子の準備などを手伝ってくださった西宮神社の氏子総代の皆様に、深く感謝いたします。また当日は、19 時から同じく西宮神社境内におきまして、中川運河助成 ARToC10 の平成 30 年度助成事業、シネクドキズムⅡのプレイベントとして、バイオリンコンサートが開催されました。シネクドキズムⅡ実行委員会代表の今井智景さんにも、オープンディスカッション準備からお手伝いいただきました。御礼申し上げます。

(以上)